

ボランティア・市民活動を広げ、応援する！

ネットワーク

Network

NO.383 2023年

4月号

特集

川は地域のたからもの

～川と市民活動～

せかいをみる

コロナ禍での海外支援

～インドネシア・ジャカルタにて

ジャカルタ・ジャパン・ネットワーク

思い立ったがボラ日

認定 NPO 法人

グッドネーバース・ジャパン

お腹もこころも満たす、ごはんの支援

いいもの みい～つけた！ vol.42

ふれあい満点市場

in ボランタリーフォーラム TOKYO 2023

セルフヘルプという力 第34回

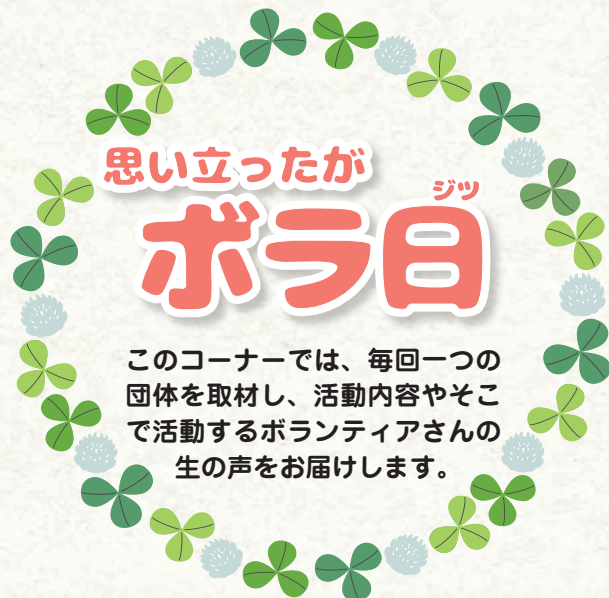
LGBTQ、性的マイノリティと理解・

関心のある人の居場所 lag (ラグ)





広い倉庫に各種分類され、保管されている。



このコーナーでは、毎回一つの団体取材し、活動内容やそこで活動するボランティアさんの生の声をお届けします。

お腹もこころも満たす、ごはんの支援 〜認定NPO法人グッドネーバース・ジャパン〜

ネットワーク 編集部

ひな祭りの3月3日、認定NPO法人グッドネーバース・ジャパン（以下、GNJP）が国内事業として今精力的に活動している、ひとり親家庭向けのフードバンク「グッドごはん」の新倉庫開設の披露目会（公開「グッドごはん」）に招待いただき、お話を伺いました。
GNJPの悲願ともなる広さをもつ新倉庫の様子や、「グッドごはん」のこと、さまざまな関わりがボランティアになる様子をレポートします。

GNJPとの出会いと新たな発見

今回、招待いただくきっかけとなったGNJPとの出会いは、2022年9月に品川区で実施された総合防災訓練です。はじめは災害担当としての関わりばかりで、災害発生時の緊急支援やそれに伴う日頃の各種関係機関との連携や情報交換をメインに活動されている団体だと思っていました。災害時の支援の一つとして、炊き出し支援を新たに考えているとのこと、東京ボランティア・市民活動センター（以下、TVAC）に相談にいらした際に、日頃は、「グッドごはん」として食料配布支援に取り組まれていることを新たに知りました。
GNJPのビジョンは、「子どもの笑顔にあふれ、だれもが人間らしく生きられる社会」。国内外で子どものこころと身体を守る様々な活動を行っています。海外事業では、子どもが安心して暮らすため、衛生環境を整備したり、教育を受ける機会を提供するために学校建設や教育支援をしたりしています。

「グッドごはん」とは？

GNJPの国内事業として、「グッドごはん」があります。新型コロナウイルスの影響等でもさらに深刻化している子どもの貧困。特に影響を受けやすいひとり親家庭を対象としたフードバンクです。月に1度の食料配布を都内各所で実施しています。東京都を中心に現在1100世帯に毎月、寄付等で集まった食料を配布しています。大阪事務所を拠点に大阪府近辺でも800世帯へ食料配布を実施しています。
今回、伺った新倉庫は、板橋区にある雑居ビルに開設されました。GNJPにとって悲願となる広さを持ち、大口の寄付を積極的に受け付けることができるようになりました。また今後、冷蔵設備も整えて、生鮮食品や要冷蔵食品の配布にも通年取り組めるようになり、「グッドごはん」の一大拠点として活躍し、支援できる家庭が4倍にも増えるそうです。

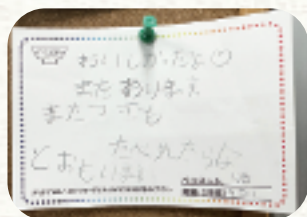




新倉庫の開設でさらに広がる支援

「グッドごはん」を利用する方々が GNJP に寄せたメッセージをみると、『「グッドごはん」のおかげで一人ではないと思える』という声が多く寄せられていました。「グッドごはん」は寄付等で集まったたくさんの食料を、多くの支援者の「あなたは、ひとりではないよ」という思いとともに、ひとり親家庭の皆さんに届ける一つのツールであり、つながりです。

こうした利用者の声の一つひとつは、活動をする人たちの大きな励みになっています。



「グッドごはん」ができるまで

GNJP の原口さんに「グッドごはん」の仕分けの様子を再現していただきました。まずは主食となるお米類を中心に、防災備蓄食を活用したアルファ米^{※1}や缶パンも。



パスタ麺もセットに様々なパスタソースから選ぶ。レトルトカレーや缶詰などのおかずも味や種類に偏りがないように選んでいく。



子どもたちも楽しみにしているお菓子の袋やお米なども一緒に「グッドごはん」の一家庭分の完成。総重量は約9kgにもなる。





【物の寄付】 支援物資となる食料の支援。フードドライブ^{※2}やAmazonほしいものリスト^{※3}を活用した支援ができる。さまざまなルール（QRコード参照）を守りながら食料を通じてひとり親家庭を支援できる。



【時間の寄付】 「グッドごはん」の仕分け指示書の一例。4人程度のボランティアで1度に約300家庭分を仕分ける。指示書の内容以外にもお米の仕分けやお菓子類の仕分けなども。GNJPではボランティアを時間の支援ということで募集している。



【お金の寄付】 支援物資だけでは足りないものの購入や、各配布場所への運送費などのために必要になる。認定NPO法人のため寄付金に対して税金の控除が受けられたり、子どもスポンサーという継続支援の仕組みもある。



YouTubeをぜひご覧ください！
GNJPの原口さんと田澤さんによる「グッドごはん」の紹介です。



今回、「グッドごはん」の紹介として、GNJPのスタッフの方から、ショート動画メッセージをいただきました。TVACのYoutubeに掲載しています。ぜひ見てみてください。

上記の写真3つにあげた関わりだけではなく、このYouTubeの動画を拡散することもボランティアのはじまりの一歩です。それぞれができる方法で少しでも関わりを持ち続けること、考える時間を持つことが大切になると思います。

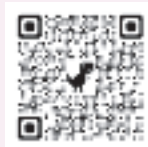
- ※1 アルファ米：炊いたご飯を乾燥させてつくった加工米。お湯や水を注ぐだけでご飯になるため、非常用に利用される。
- ※2 フードドライブ：家庭で余っている不用食品を集め、食品の支援を必要としている福祉団体や施設などに寄付する活動。
- ※3 Amazonほしいものリスト：ほしい商品をリスト化する機能。本名や住所を明かすことなく、商品を贈ったり受け取ったりすることができる。

GNJPでは、俳優の水石亜飛夢氏が発起人となるクラウドファンディング（2023年4月20日締め切り）に取り組んでいました。このクラウドファンディングは、昨今の物価高騰で苦しむひとり親家庭へ、少しでも多くの家庭に食料配布ができるよう、そして給食がなくなる夏休み期間に、いつもはなかなか配布が難しい野菜や果物・お肉などの生鮮食品を配布食料とともにお渡しすることを目標にしていました。

一昨年も実施し、1,000万円近く of 支援が集まり、約1,000世帯へ食料配布ができました。このクラウドファンディングの支援は終了しましたが、この取り組みの様子は右記QRコードより確認できます。ぜひ今年の支援の取り組みにも注目してください。



クラウドファンディングの取り組み状況を確認できます。支援の輪が広がっています。



深める

ボランティア・市民活動に役立つ視点や情報をお届けします。

特集

川は地域のたからもの ～川と市民活動～

6 寄稿 あそびを通して川を知る

◇NPO 法人 砧・多摩川あそび村 上原 幸子

9 “荒川で ちょっといいこと ごみひろい”

◇NPO 法人 荒川クリーンエイド・フォーラム

12 川の活動アラカルト

◇川はともだち／八王子・日野カワセミ会／NPO 法人
ア！安全・快適街づくり／おさかなポストの会

14 インタビュー 川でのリアルな体験を原点に ～“いい川” づくりをめざして

◇NPO 法人 多摩川センター 山道 省三

16 編集部コラム へんコラ 生態系と川／東京の暗渠

知る

ボランティア・市民活動のさまざまな形やボランティアに
一歩ふみだすヒントを、ご紹介します。

1 思い立ったがボラ日 お腹もこころも満たす、ごはんの支援 ～認定 NPO 法人 グッドネーバース・ジャパン～

17 セルフヘルプという力 第34回 自分のジェンダーとセクシュアリティをすべての人が 大切にできる社会に向けて LGBTQ、性的マイノリティと理解・関心のある人の居場所 lag (ラグ)

21 TVAC News 連載 vol.7 東京ボランティア・市民活動センターの事業から 連合東京の取り組みと「災害時のための市民協働 東京憲章」

22 つぶやきブレイク vol.27 文学者とともに過ごすやさしい時間

23 せかいをみる④ コロナ禍での海外支援 ～インドネシア・ジャカルタにて ◇小林 良子 ジャカルタ・ジャパン・ネットワーク

26 いいもの みい～つけた！ vol.42 ふれあい満点市場 in ボランタリーフォーラム TOKYO 2023

もしもボランティア活動中に怪我をしたら…
怪我をさせたり、物を壊したら…

※ボランティア保険および行事保険の加入は、東京都内の各区市町村のボランティアセンターまたは東京都社会福祉協議会窓口で手続きができます。



東京都社会福祉協議会指定生損保代理店
有限会社 東京福祉企画

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2
研究社英語センタービル 3階

TEL: 03-3268-0910
FAX: 03-3268-8832
URL: <http://www.tokyo-fk.com/>

表紙のことば

花々がくちぐちに“おはよう”と咲きます
若葉たちもいっせいに、おはよう、おはよう、おはよう
木々が若い緑におおわれて、人々も“おはよう”と
ことほぎます
今日いちにちの希望を

—フローラル信子



都内には大小合わせて107もの河川があるとされる（都資料による）。



香川



神田川

特集

川は地域のたからもの ～川と市民活動～

犬と散歩する土手の道。通勤電車の中から目にする川。
鳥がさえずり虫のささやく、川辺の草むら。
わたしたちの暮らしのそばにある、川。

今号では、川をフィールドにした市民活動を取り上げる。
あそび場づくり、ごみひろいから環境を考える、2つのNPO法人と、
次世代につなぐ、野鳥観察、防災まちづくり、生態系をテーマとする4団体の取り組みだ。

これらを通して、川と人との縁の深さや多様さをお伝えしたい。
そして、あらためて「川」への興味や親しみがわき、
身近な環境との関わりに気づくきっかけとなれば幸いである。

まずは、これを機会に、川を訪ねてみよう。



多摩川（写真提供：NPO 法人 砧・多摩川あそび村）



黒目川（写真提供：NPO 法人 多摩川センター）

寄稿

あそびを通して川を知る

NPO 法人^{きぬた}・多摩川あそび村
理事長 上原幸子



多摩川の河川敷を拠点に、自然体験あそび場「^{きぬた}・多摩川あそび村」(通称・きぬたまあそび村)を世田谷区の委託事業として運営しています。プレーワーカーと呼ばれるスタッフが常駐し、日常的に自然遊びのできる子どもの居場所として週4日開園しています。多摩川の自然を生かした遊び場づくりを、地域とともに行なってきました。多摩川の自然を楽しみながらの親子参加型の草刈りなどが関わる余地を残した場づくりが、大切な地域資源として守る心を育んでいます。

多摩川河川敷の 自然体験遊び場づくり

二子玉川より少し上流にある多摩川河川敷の原っぱ。草花や虫たちとふれ合える遊べる自然空間が広がっています。大きなシンボルツリーの周りにはベンチや遊べる井戸、ツリーハウスやトンボ池ビオトープ*などがあります。ここにある施設は、住民参加型で子どもたちとつくってきたもの。多摩川源流の山梨県小菅村までヒノキ間伐材を調達に行き、樹皮を剥ぎ時間をかけてつくることが楽しみ、またつくった後も人の出番のある居場所づくりを行なっています。あるお父さんは「子どもは勝手に遊ぶので、ここに来るとこれが

僕の仕事です」と草刈りをしてくれず。どろんこになって遊ぶ子どもたちを少し離れてゆったり見守り、自然を楽しみながらの子育て仲間づくりも盛んです。

活動が始まったのは1999年。周囲には少年野球場などが広がっていますが、平日は人がなく子どもだけで行つてはいけなと言われる場でした。子どもを自然の中で遊ばせたい地域の親たちが中心となり、行けば誰かがいる子どもの遊び拠点と、月1回のきぬたまあそび村が始まりました。子どものやりたいことになるべく規制をかけない「自分の責任で自由に遊ぶ」場をつくりたいと、子どもから遠ざけられている火や工具にふれる機会をつくり、賛同者を少しずつ増やしてきました。

「多摩川水系河川整備計画」 との出会い

活動を立ち上げたその年に関われたのが「多摩川水系河川整備計画」です。計画の策定という目標に向かって、市民・自治体・河川管理者・学識者が一堂に会して意見交換を行なう、全国に先駆けて生まれた新しい仕組みでした。流域の各自治体で「ふれあい巡視」が行われ、世田谷では遊び場づくりの意見を出し、実現の可能性が生まれました。国土交

通省のアドバイザーで、近隣の学校や町会など地域団体に呼びかけて協議会を立ち上げ、2007年には世田谷区の「自然体験遊び場事業」となり、現在は河川協力団体としてNPO法人で台風時の施設撤去を行なうなど、官民協働で遊び場を支えています。

また多摩川では、上下流の自治体と市民・学識者・河川管理者がパートナーシップをもって議論する「多摩川流域懇談会」があり、流域・人・世代をつなげる「多摩川夢ビジョン」構想を元に、上下流の交流とセミナーを行なっています。

子どもとおとなの 「やりたい」を実現する

きぬたまあそび村では「多摩川をおもしろがる」場づくりをしています。自然遊びに詳しい専門家の協力で、春は野草の天ぷら、夏は川あそび、秋は外来種を使った草木染め、冬はハマダイコンなど多摩川の七草粥と、四季を通しておとなの「知る欲求」を満たす魅力があります。それに対し子どもは「やりたい」と思うことが「あそび」であるため、イベントを目的化せず、虫を捕まえた、土手すべりがしたい、ただ土を掘りたい、ひたすら走り回りたいなど単純なことが思いつきりできるよ

*生きものの生息空間。ここではトンボにとって生息しやすくなる工夫を施した池。



遊べる井戸。



半円陣を組んでガサガサ。



自然素材で
作って遊ぶ。

**NPO 法人
砧・多摩川
あそび村**




う、それぞれの「やりたい」を見出せる懐の広い「あそび」の環境設定が大切だと考えています。

からだまるごと体感する 川あそびの魅力

「やりたい」と思うことで規制されることの最たるものが川あそびかもしれません。そこで、多摩川に詳しい専門家が関わることで安全に川あそびができるよう、川の楽しさをたっぷり味わう企画を行ないます。

まず安全に遊ぶには必ずライフジャケットを着ること、ケガを避けるため長袖長ズボンや運動靴など肌の露出がないよう、裸足やサンダルでは入らないことなど、川との正しい付き合い方も遊びの中で体験します。川の安全を学ぶ川あそびが「川流れ」で、ライフジャケットで浮きながら流れに身を任せ、流され方や立ち上がる時の身のこなしも覚えます。そしてシュノーケリングで川の中をのぞき、泳がないことで魚たちは警戒せず、水の中で自然な姿を見せてくれます。「川流れ」は股下くらいの深さで行なうのに対し、タモ網を使った遊び「ガサガサ」(写真上左)は、膝下くらいの深さで行ないます。水際の草の根元や石を足でガサガサし、驚いて飛び出して来た小魚やエビなどを捕まえます。ナマズなど大

物が潜んでいそうな場所は、網で半円陣を組んで一斉にガサガサします。わたしの娘は小学生の頃、流木にいた大ウナギを捕まえた経験を持っています。大きすぎて網に入り切らず逃げられました。その時の重さと驚きはいくつになっても忘れられない貴重な記憶となっています。

こうした体験ができるのも多摩川の水質の改善が進んだからこそ。一時の環境汚染も下水道整備により水質が改善し、江戸時代に献上鮎で有名だった鮎も戻ってきています。最近ではきぬたま有志親子による「釣りクラブ」も始まりました。汚染の歴史を伝えるだけでなく、からだごと川とふれ合う体験をおして、川をきれいにしたい気持ちに実感が伴うのです。

次に、子どもたちが企画し、おとなたちが応援して実現した2つのプロジェクトをご紹介します。

多摩川13.8kmを歩いた喜多見 児童館の子どもたちから生まれた 「宇奈根の渡し」

きっかけは地域にある喜多見児童館が「多摩川13.8キロの旅」を企画し、子どもたちと河口0キロ地点から最初の一滴である山梨県の笠取山の水干^{みなず}まで2年間で12回も歩いた



夢叶丸に乗って渡る。

こと。「大師の渡し」という記念碑を見て自分たちの地域にも「宇奈根渡し場道公園」という場所があると気づき、また暴れ川だった多摩川が、元は1つだった宇奈根を両岸に分断したと知り、渡し舟で川崎の宇奈根の子どもたちを世田谷から迎えに行き遊びたいという発想が地域のおとなたちを動かしました。

有志の子どもたち25人の作戦会議は20回にも及び、地域で舟づくりも教えてもらい手づくりの舟「夢叶丸」が完成。舟の運搬や子どもたちの棹差し練習のサポートをする実行委員会が立ち上がり「宇奈根の渡し」が実現。多摩川を挟んで世田谷区と川崎市の包括協定にも発展しました。きぬたまあそび村も実行委員会の一員として、川の安全管理のお手伝いをしていきます。子どもが船頭として両岸をつなげるイベントは、次世代の子どもたちに引き継がれ、今年で10年目を迎えます。

多摩川河川敷遊び場の復興
「ツリーハウスリメイクプロジェクト」

2019年10月、台風19号で水を被り、汚泥やごみ、流木が堆積し、皆でつくってきた遊び場施設は壊滅状態でした。地元町会長さんの声かけで地域の建設会社の方が「うちの子もお世話になった」と重機をつかって作業してくれるなど、地域一丸となつての復旧活動により約1ヶ月できぬたまあそび村の再開が叶い、現地で防災フェスを開催して遊び場再建の寄付を募りました。

台風から4ヶ月、今度はコロナ感染症により学校の一斉休校で居場所



台風で倒された樹を起こす。



新しくなったツリーハウス。

を失った子どもたちのために、きぬたまあそび村を週6日自主開園しましたが、緊急事態宣言により活動休止。そんな折りに子どもたちから「ツリーハウスをつくり直したい」と意見をもらい、再建プロジェクトが立ち上がりました。初代ツリーハウスは、近所にあった多摩美術大学夜間部の学生と子どもたちが「秘密基地プロジェクト」として一時的につくったものでしたが、樹に負担をかけない構造につくり換えるなどその後も大事にされ、「きぬたま20周年イベント」でツリーハウスのタイムカプセルをオープンしました。当時子どもたちも大学生になり、今で

はきぬたまあそび村を手伝いに来てくれています。

今回の再建プロジェクトは、小学生の子どもたちがアイデアを考へ、専門家の協力で奥多摩の山さんにお願ひして常連親子17名での資材調達がありました。皆で協力して木を切り倒す手順や加工して木材となるまでの大変さを改めて実感し、樹皮を剥ぎ生木を乾燥させ、数ヶ月かけてツリーハウスが完成しました。子どもたち主催の完成お披露目会では、間伐が森と川を元気にすることを紙芝居で伝え、いつも遊んでいる川と森のつながりを肌で感じる貴重な機会となりました。

真ん中に子どもたちの想いがあること。子どもたちを応援するおとながいること。楽しかった体験が次の支援者を生む地域循環につながることを改めて実感しました。



上原幸子(うへはらさちこ)

武蔵野美術大学 通信教育課程 デザイン情報学科教授
多摩川流域懇談会市民部会委員。住民参加による子ども居場所づくりなどのコミュニティデザイン、コミュニケーションデザインに取り組み。警視庁マスコットキャラクター「ピーボくん」の作者でもある。

“荒川で ちょっといいこと ごみひろい”

NPO 法人 荒川クリーンエイド・フォーラム



拾ったごみと一緒に集合写真

荒川は みんなの憩いの場なのに…

東京の東側を流れる荒川の下流部は、人工河川（放水路）であることをご存じでしたか？荒川放水路は1910（明治43）年の大洪水を契機に作られ、過去の大型台風による洪水から、下流に住む人々の暮らしを守ってきました。そして、今では、河川敷で散歩をする人、自転車に乗る人、ジョギングする人、野球をする人、水上でボートに乗る人もいます。水質も一時よりきれいになり、トビハゼやカニなど多様な生物が棲んでいて、地域の人たちがお世話している猫のお家もあちこちに。

そんな近隣の人々や生き物の憩いの場なのに、ごみがたくさん落ちていくのです…。こうした状況をなんとかしようと、市民・企業・行政が一緒に取り組んでいます。

市民・企業・行政が連携して

「おはようございますー」「昨日と違ってちょっと寒いね」。3月が始まったばかりの日曜日の朝、リコージャパン株式会社（以下、リコー）の社員とその子どもたちが集まってきました。今日は企業主催の荒川でのごみ拾いの日。30年近く荒川の環境保全を行っているNP

法人荒川クリーンエイド・フォーラム（以下、ACF）との協働プロジェクトです。

リコージャパンではコロナ禍前は100名近い規模で実施していました。取引先の企業と協働で開催し、社員の他に一般の人たちや子どもたちも参加していたそうです。しかし、コロナ禍で活動ができず、3年ぶりの開催となりました。今回は50名ぐらの規模に抑えて、社員の家族の他に、取引先の企業や足立区の職員の人たちも参加しています。

ACFによる オリエンテーション

リコージャパンの管理職の人が開会のあいさつをした後、ACFからのオリエンテーションがあります。「ごみをそのままにしておく、河川だけではなく、海の生物も暮らせなくなってしまう。そして、私たち自身がそのごみを食べた魚たちを食べて暮らしているのです」。そして、ごみの分別の仕方や安全対策の説明がありました。最後に、「あまり真剣にならずに、チームでコミュニケーションをとりながら、楽しくやってください。河川には葦（ヨシ、または、アシ）が茂っている、その中のごみを拾うときに、夢中で顔をつっこむと、茎が顔をつ



岸辺のごみ拾い



親子でのごみ拾い

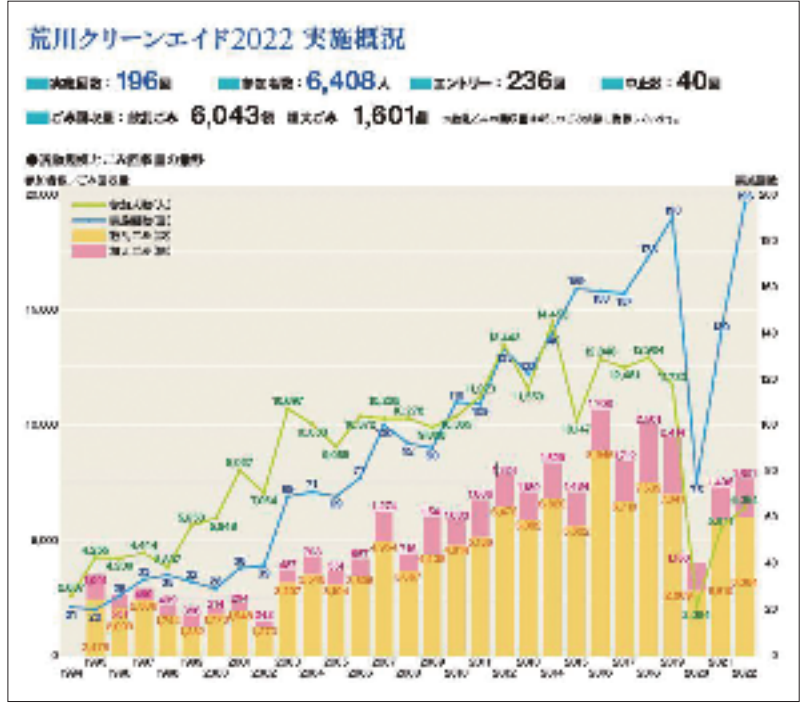


表1 活動規模とごみ回収量の推移

ついたりするので要注意です」と、アドバイスがありました。

川は学びの場&あそびの場

まず、6〜8名ずつのチームを作り、自己紹介をして、いよいよ活動スタート。葦の中へ中へと進むチームもあれば、川の岸を進むチームもあります。「何だ、これ?」「え、やだ〜!」という声があちこちで飛び交います。泥だらけの巨大なぬいぐるみもあれば、ステレオのデッキが落ちていたり…。砂に埋まったポリ袋と格闘する社員たちも。

一方、子どもたちは、慣れないトングを使いながら、楽しそうです。今回初めて参加した子どもの母親は、「子どもたちにしてみると、クレーンゲームをしているような感じです(笑)。土曜日は学校の行事や習い事があつたりするので、日曜日の方が参加しやすいですね。午前中に活動して、午後は東京スカイツリーにでも寄って行こうかな」と話してくれました。私たちの後ろで子どもたちが大きなベンケイガニを見つけて歓声をあげました。子どもたちにとって、川は自然体験ができるあそび場のようです。

果てしないごみをどうしよう?

そして、1時間ぐらい活動したら、再度、全体で集合。各チームがごみの種別を調べて記録します。今日の成果は、燃えるごみ38袋(45L)、PETボトル17袋(45L)、びん10袋(25L)、缶13袋(25L)、粗大ごみ23個でした。短い時間でもこんなにたくさんのごみが集まりました。チームでの振り返りの時間には、「たくさんのごみがあつて拾いきれない。もっと多くの人に参加してもらわないと」「そもそも、ごみを出さないように考えた方がよい」など、いろいろな意見がでます。リコージャパンのSDGs推進グループの方は、「こうした活動に社員が1回でも参加することによって、仕事の中でも、生活の中でもごみや環境のことを考えるようになります。もっと多くの社員や一般の人たちに参加してもらえるように継続していきたい」と話してくれました。

「荒川クリーンエイド」の始まり

さて、ACFの誕生は1994年に、建設省荒川下流工事事務所(当時)の呼びかけで始まった一斉ごみ拾い、「荒川クリーンエイド」に端を発します。クリーンエイドとは



YouTube
「荒川ブラックスーツ団ちゃんねる」



ACFの今村さん（左）と赤城さん（中央）、リコー
ジャパンの鳴島さん（右）



マイクロプラスチックで作ったア
クセサリー

「荒川クリーンエイド」は、市民と行政と企業による協働の取り組みです。2019年には年間190回、参加人数1万人以上だった活動が、コロナ禍の2022年には75回、約2千人まで落ち込みました（前ページ表1）。そこで、ACFでは、SNSを活用したオンラインでの活動

コロナ禍では オンラインでの活動

Clean（きれいにする）+ Aid（助ける）の2つの言葉から成る造語です。「ごみを拾って、自然を助ける豊かにする」活動」をクリーンエイドと呼んでいます。この行事に参加した市民団体が中心となり、1997年に任意団体の荒川クリーンエイド・フォーラムが結成されました。1999年にはNPO法人に認証され、ごみ拾いを中心に、環境教育や生物多様性の保全などにも活動を展開しています。

を展開しました。

その1つが、YouTubeに「荒川ブラックスーツ団ちゃんねる」の開設。楽しく、真面目にごみ問題やその活動をアピールしています。この動画を見て、感想を寄せたり、「いいね」などのリアクションをするだけでもボランティアになるそうです。

もう1つは、最近問題になっているマイクロプラスチック（微小なプラスチックのごみ）を使って、イヤリングやキーホルダーなどを作る活動「rad to（エイドトゥ）」。ACFのスタッフがオンラインでごみの問題やアクセサリーの作り方を説明。最終的には想像を超える素敵なものができあがります！「これを知り合いに見せて、ごみの話をしてください」とそれがボランティアになります」とACFのスタッフ。

全国に広がる市民・大学・企業・ 行政の取り組み

最後に、ACFの活動の今後について、事務局の今村和志さんにお聞きしました。「少しずつコロナ前の状況に戻ってきました。このところSDGsなどの動きがあり、企業各社からの問い合わせが増えていきます。また、大学から授業の依頼も増えます。全国にはこうした河川を守る

る活動をしている団体が数多くあるので、東京以外の都市でもNPOと行政、企業、大学とのコラボレーションができないかと考えていて、今年から大阪の淀川でスタートします」とのこと。

「ごみを拾った人はごみを捨てない」という法則があるようです。そうであれば、できるだけ多くの人が1回でもよいからごみを拾う体験をして、その体験から、ごみを捨てない、あるいは、ごみを出さないことを考えるようになったら、川はもっともっと豊かになって、多くの恵みを私たち生きもの全てにもたらしてくれるのではないのでしょうか。

NPO 法人
荒川クリーンエイド・フォーラム



リコージャパンの
サステナビリティ
社会貢献活動



東京都荒川河川敷にて
「荒川クリーンエイド」を開催



川はともだち



環境省プロジェクトの一環「森里川海ふるさと絵本〈ありがとうあらかわ〉」の製作メンバーを中心に、会を2019年3月結成。私たちは、絵本づくりを通して隅田川と地域の人たちとの深い関わり合いを知り、かつてのように綺麗な隅田川の水辺の遊びを復活させたいと願って活動を始めました。そして乗船を楽しんで載けるように手造りボート・乗船時の機材を安全最優先で製作をしました。是非一緒に楽しんでください。

その他、今の隅田川の水質検査および勉強会、絵本「ありがとうあらかわ(荒川区版)」による隅田川と人々の生活の歴史の読み聞かせなども行っています。

おもな活動日:臨時開催/ボート乗船会は目下、未定(於、瑞光橋公園ワンド*).

*ワンド…川の本流とつながっていて、河川内の工作物などに囲まれて池のようになっている場所

ワンドは、昔は東京の物資輸送の玄関口、隅田川越しのスカイツリーの眺望もよし、この付近では今でもスズキやウナギも釣れる。隣接する汐入公園では散歩はもちろんバーベキューもできるよ。
川はともだち一同



*手造りのボートは、安全はもちろん、デザインにおいてもこだわっていらっしゃるからお話されている様子から楽しさが伝わってきました。地域の方がより身近にある隅田川の良さを、あらためて感じてもらえる活動だと感じました(編集部)

八王子・日野カワセミ会



1985年に10名で行った探鳥会(野鳥観察会)が会の始まり。主な活動エリアは、都内でも自然に恵まれた、八王子市・日野市内の高尾山エリア及び浅川・多摩川と支流の流域。野鳥や自然に親しみながら、環境保護につながる活動を行っています。活動は八王子市・日野市及びその近隣での探鳥会実施(年数回は遠出も)、調査活動として、コース別の月例野鳥定期カウント、夏鳥や冬鳥、ツバメの集団ねぐら、秋のタカの渡りなど。活動の様子や開催のお知らせは、当会ホームページやTwitter、年2回発行の会報『かわせみ』をぜひご覧ください。

おもな活動日:公開探鳥会 3月第2日曜(浅川/多摩川の冬鳥)、5月第2日曜(裏高尾でオオルリを探す)、10月第2日曜(浅川に渡ってきた冬鳥)等。カワセミ会ジュニアクラブ 原則として8月除く毎月第4土曜

子どもたちへの野鳥観察の指導や巣箱かけなども行っています。流域の豊かな自然と野鳥に出会える活動です。ぜひ、参加してみてください。当会が編集した『見る! 聞く! 歩く! 高尾・浅川野鳥図鑑』(900円+税)もお勧め。野鳥の魅力にハマります! カワセミ会会員一同



*編集部推しポイントは、地元の小中学校や町内会、自然保護団体の依頼を受けて野鳥観察を支援していること! 環境の保護だけではなく、活動がさまざまな人や地域、グループをつないでいることを感じました(編集部)

NPO法人ア!安全・快適街づくり



東京都葛飾区新小岩北地区は、荒川・中川・新中川という三つの河川に囲まれた地域。低地帯であるこの地域は「浸水」のリスクとともに「親水」の可能性を持っています。ア!安全・快適街づくりは、こうした地域で、防災や街づくりをコンセプトに、2002年から活動をしています。地域住民や専門家、大学、行政等、多様な人や団体が集って知恵や経験を共有する輪中会議のほか、勉強会やシンポジウム、河川の調査、ボートによる避難・救助体験、小学校などへの出前授業、防災体験アプリの開発など、活動は多岐にわたります。

おもな活動: 輪中会議*、出前授業、ボートによる避難・救助体験、年刊誌の発行、中学校での部活支援など
各所活動日: 随時ホームページでお知らせいたします。

*輪中会議…多様な人や団体がまちづくりについて話し合う場

「防災“も”街づくり」をキーワードに活動しています。私たちの活動事例が、ほかの低地帯の市街地のモデルとなり、発信されることを願っています。他の地域の人も多く参加しています。ご関心ある方は、ご一報ください。

*かつて本誌で取材した際、メンバーの方々が活動について楽しそうに話されていたのが印象的でした。“地縁”と“知縁”を生かして「安全快適な東京一番の街に」という気概が感じられます! (編集部)



(上) 輪中会議 (下) 防災アプリ開発 / ボート訓練 / 出前授業の様子

おさかなポストの会



多摩川を拠点として、各地の川や湖沼で獲れた水の生き物を引き受ける「おさかなポスト」の活動を通じて、外来種問題に取り組んできました。活魚タンクを積んだ車で各地を巡り、飼いきれなくなった水の生き物をあずかり、自然界に放つことなく次の飼い主につなげる取り組みを行っています。また、啓発の目的も兼ねて「移動水族館」「水辺の安全教室」「自然観察会」等を開催しています。外来種を自然界に放つことの問題点、水の生き物であっても「終生飼育」することの重要性を伝え、どうしたら解決に近づけるのかをひとりひとりに考えていただきつつ、同じような取り組みが全国に広がることを願っています。

イベントは随時Facebookで告知していますので、ぜひスタッフとしてご参加ください。また、外来種を釣った・捕まえた場合は、決してリリースをせず、当会までご一報ください。

次々新しい楽しい取り組みを企画するとともに、今まで行ってきたことも決して疎かにはしないよう、日々活動しています。それでもすべての原動力は『楽しい』ことであること。皆さんのご参加お待ちしております。

* 飼い主が捨てた熱帯魚やカメなどが各地の川や湖で繁殖して在来種の生き物を圧迫しています(→16ページ)。そうした問題を考える取り組みにふれて、自然環境に関する知識・意識をワンランク深めてみませんか? (編集部)



インタビュー

川でのリアルな体験を原点に

「いい川」づくりをめざして

NPO法人 多摩川センター 代表理事 山道省三



写真1 黒目川（埼玉県朝霞市）の“いい川”づくり。

護岸をコンクリートで固められた3面張りと言われる川も、かつては土手に草花が咲き魚の泳ぐ姿がありました。暮らしの移り変わりを映し出す河川環境を40年以上、みつめてきた山道省三さんにお話をうかがいました。

日本の川づくりの変遷

わたしは長崎県出身ですが、子どもの頃は川や山でよく遊んだものです。小さな川に虫や鳥、魚がいて、川沿いの石垣の上にはみかんや柿の木などがあって、そこが遊び場でした。川にはおもしろさだけでなく怖さもあって、水遊びや生き物とのふれあいには感動を覚えたものです。

高度経済成長期（1960～80年頃）、家庭排水などの流入から川の水質汚濁が問題になり、川に入らないようにしようという看板がそこら中の川に立つようになりました。そして川の構造も大きく変わりました。河川を管理する国や自治体は治水^{*1}を第一に工事を進め、洪水対策として大量の雨水を早く海まで流すため、街中の河川は平らでツルツルなコンクリート護岸に様変わりし、川におりられなくなってしまうし、子どもたちの遊び場だった河原には

野球場やサッカー場などが次々と整備されるようになったのです^{*2}。

こうしたなか、昔のような自然にあふれ、子どもたちが水遊びに歓声をあげる川を取り戻そうじゃないかと、わたしのような川遊びを体験した世代が中心になって声をあげました。日本の川づくりを変えていこうと河川管理者も交えて話し合ったり、スイスやドイツで行われていた近自然河川工法に着目して勉強会を開いたりしました。多自然川づくり

（写真1）と日本では呼んでいます。川づくりに対する機運の盛り上がり背景に、1997（平成9）年に河川法が改正されました^{*3}。そのポイントは「治水」「利水」に「河川環境の整備と保全」が加えられた点です。ひと言でいえば、豊かな自然にふれ子どもが遊べる川にしようというものでした。今、世界的に気候のバランスが悪くなり、洪水が懸念されていますね。日本では森林や時には田んぼが雨水を貯留する役目を果たしてきたように、川だけではなく流域全体で水をコントロールできる地域づくりを、国土交通省ではめざしています。しかし洪水と共存し、しかも自然豊かな川づくりをどのように進めていくのか、その両立に苦慮しているのが現実です。

川でのリアルな体験が いい川づくりの推進力

「いい川」づくりへの理解を広めるには、川でのリアルな体験が欠かせません。そこで学校の授業や住民活動などを通して子どもたちを川に連れて行き、まずは川を好きになつてもらおうとしてきました。

「いい川・いい川づくりワークショップ」は昨年で24回目を迎えました。全国各地から「いい川」と思う事例を持ち寄ってもらい、2日間にわたり議論し、川のタカラモノを発見しようとするものです（写真2）。地域の人たちでお祭りをやったり、川の清掃をしたり、川の中に入って遊んだりとさまざまな活動が紹介されます。最近では高校生や大学生が参加するようになり、いいことだなと思います。

実はこの「いい川」には定義がありません。川は一本一本違っていて、それぞれにいいところがあります。どこら辺がいいのだろうと質問したりするうちに、思わぬ「いい川」の発見につながります。どうやら川と地域の関係がしっかりとしているところが高い評価を受けているようです。

多自然川づくり…自然などに配慮した川づくり。良好な川を取り戻し人と川との関係を作りなおそうとする取組み。



写真3 暗渠の上の道（渋谷区）。



写真2 ステージでの“いい川”づくりの取り組み発表（いい川・いい川づくりワークショップ2022年開催）。

さまざまな顔を持つ東京の川 〜一級河川から暗渠まで

多摩川や荒川などの一級河川は、国土の安全と福祉に供するうえでとくに重要とされる河川で、国土交通省が管理し、そのほかの二級河川は都道府県が管理にあたります。本流に流れ込む支流を含めて多摩川水系、荒川水系などと呼ばれます。原則として河川は誰でも自由に利用できますが（自由使用の原則）、他人の利用を妨げたり洪水をコントロールする施設に支障を生じさせたりしないように、河川法で一定の制限が設けられています。

東京では武蔵野台地や多摩丘陵の谷戸から、湧き水を水源とした小さな川がたくさん流れ出しています。渋谷川のように、今は蓋をされ、その上が歩道になった川（暗渠・写真3・p16参照）もあり、ここでは雨が降ったときに耳を澄ますと、ざーと水が流れる音が聞こえます。

身近に川のあることの大切さ

多摩川で人びとが何をしているか、西暦2020年から10年ごとに調査をしています。ボランティアを募集して多摩川の両岸の堤防の上を1〜2キロ歩いてもらい、どんな利用をしているかを記録するものです^{*1}。3回目の2021年には約60人のボ

ランティアが参加して行われました。その結果はスポーツや散策をする人たちが多かったのですが、その散策にはただぼーっとしている人も含まれています。このぼーっとするよう

な空間が街中にはないんです。水が流れ、ほのかな草や花の匂いがして鳥が飛んでいるような場所で、何をすることもなく太陽や風に当たって過ごすことはとても重要で、そんな空間が身近にあることは今では宝物です。

コロナ禍、わたしは自転車が多摩川兩岸を、四季ごとに河口から羽村間の往復約120キロ走ったことがあります。誰もいないだろうと思ったら、たくさんの方が訪れていました。コロナ禍だから人に会わないとか、部屋にいたとかではなくて、外に出て解放されたいという人たちがたくさんいました。これからの川がどうあるべきかを考えるうえで、とてもいい体験になりました。川には人工的なものが無く、広い空と流

れと草や樹木にあふれた空間であればそれでいいという気がします。

*1 水害や土砂災害を防ぐこと。堤防やダム、護岸、遊水池等の整備があげられる。近年の気候変動にもない頻発する水害・土砂災害等に対し、国土交通省では「流域治水」の考え方をもとに対策を推進している。

*2 1964（昭39）年の東京オリンピックを契機に、国民の健康と体力増強の方針が打出され、大都市周辺では企業等が占用していた河川敷を、一般市民向けの広場や運動場等に開放する動きが促進した。

*3 法改正の背景には当時社会問題となった長良川河口堰をめぐる自然保護運動や根強い川の自然復元要請があるとされる。もうひとつの法改正の焦点は「地域住民の意見の反映」が盛り込まれたことで、これにより水系ごとの「河川整備計画」に住民参加の道がひらけた。

*4 『西暦2020年の多摩川を記録する運動活動報告書』は多摩川資料室（二ヶ領工コミュニケーション内）でその他の多摩川文献とともに閲覧可能。

山道省三（やまみちしょうぞう）



1949年、長崎県長与町生まれ。子どもの頃、川や魚と慣れ親しむ。NPO法人多摩川センター、NPO法人全国水環境交流会の立ち上げから関わり、現在は両団体の代表を兼任。住民の社会参加、NPOの運営等、仕組みづくりを進めている。

NPO法人多摩川センターは、渋谷区にある事務局や「多摩川ふれあい教室（府中市郷土の森博物館内）」を拠点に、川関連の調査やイベント開催等を通じ“いい川”づくりや“いい川”の保全、普及に努めている。



●生態系と川 せいたいけいとかわ

どんな気候や地形にも、動物・植物から微生物までさまざまな生物が暮らして、たがいに密接にからみあって、ひとつの世界を形づくっている。そのさまを「奇跡的に安定した系」であるとの意味をこめて「生態系」と呼ぶ。何十万年、何百万年かけて生物たちがたどり着いた、かけがえない共生の小宇宙だ。

ところが、生態系のなかの生物たちは絶妙なバランスで複雑につながりあって、種がひとつ絶滅したり、外来種が入って来たり、気候が変化したりすると、めぐりめぐって生態系全体が影響を受け、自然環境は貧弱化、脆弱化してしまう。米国のイェローストーン国立公園ではかつて、野生動物を増やす目的でオオカミを駆除したところ、かえって動植物が減少し、最終的には野山の荒廃を招いてしまった。90年代になってオオカミを再導入¹すると、増えすぎたヘラジカが減る→樹木が食害されずに育つ→木を必要とするビーバーが大復活→ビーバーが作った水辺にさまざまな鳥や動物、植物が戻ってくる→というように、各種の変化が一斉に起こって、ほどなく以前の豊かな自然環境が帰ってきたという。

日本の川や河原にももちろん独自の生態系があり、数えきれない種類の生き物が暮らしている。カヤネズミやイタチ、タヌキなどの哺乳類、サギ類、カワセミ、ミサゴなど魚を食べる鳥たち、おなじみのカマキリ、カメやカエルたち、さまざまな魚、カニやエビ、虫たち、水辺や河原に生える植物の数々――。

でも、こんなにち見るそれらは、もともとそこにあつた生態系と同じものではない。治水対策として護岸工事が徹底的に進められた結果、日本の川の自然環境は様変わりし、多くの生物が住処を追われた。かつて日本中の川で見られた「ホンカワウソ」の姿はもうどこにもない²。かわりに、アライグマやヌートリア³、ミドリガメ⁴、ブラックバスやブルーギルなどの釣り魚、河原を覆いつくすアレチウリ等々、過去にはいなかった動植物がすっかり定着してしまっている。「タマゾン川」で検索すれば、多摩川で見つかる熱帯魚の種類の多さに唖然とさせられる。

これらの多くは捨てられたペットや釣り人が放つた魚たちの子孫だが、このように世界各地からやってきた「外来種」は、昔から棲んでいた在来種と競合し、ときには在来種を絶滅に追いやることもある。そうでなくとも、右に説明したように、少なくとも既存の生態系を貧弱脆弱にする要因にはなってしまうだろう。

豊かな川の環境を維持するためには、できるだけ本来の形に近い健康な生態系が不可欠。そのために、生物が棲みやすい川づくりや気候変動対策などやるべきことは多いが、手近にできるのは外来種を減らす努力だろう。「ペットを捨てないで」「鯉を放流しないで⁴」と呼びかけたり、外来種を捕まえたなら決してリリースしないなどの基本を心がけていきたい。

*1 ある地域である種が絶滅したときに、他地域から同じ種を連れてきて(人工繁殖のうえ)地域内に放ち、再び根づかせること。日本ではトキやコウノトリの例が有名。
 *2 最後に目撃されたのは1979年で、2012年に絶滅種として認定された。絶滅原因は護岸工事のほかに水質汚染、また明治期以降の狩猟圧も大きかったとされる。
 *3 ヌートリアは南米原産の大型のネズミのなかま。猫ほどの大きさになる。ミドリガメは正式にはミシシッピアカミミガメといい、名前のとおり米国原産だ。
 *4 実はコイも外来種。生命力が強いうえ何でも食べるため他の動植物を圧迫しやすいとされ、IUCN(国際自然保護連合)は「侵略的外来種ワースト100」に数えている。

●東京の暗渠 とうきょうのあんきよ

空を映して流れる水路全般を「開渠」というのに対し、コンクリートの板などで蓋をした下を流れる「地面の下の水路」を「暗渠」という。

かつて東京の市街地は今よりずっと小さく、周囲には農村が広がり、多くの川が田畑を潤していた。渋谷駅周辺には蛍が飛び交い、原宿キャットストリートのあたりでは穂田川が水車を回していた。現在の代々木公園の西には河骨川が音をたて、童謡「春の小川」が生まれた。

関東大震災以降、街は郊外に向けて大きく広がりはじめたが、下水道の整備が後手々々にまわつたため、川は生活排水の捨て場となった。やがて多くの川はひどい悪臭を放つ「ドブ川」となり、臭いに耐えかねた地域住民が「川に蓋をしてほしい」と行政にうったえる事例も多かったという。1964年の東京オリンピックが近づくと、街並み美化を進める動きの中で、こうした川の多くは蓋をされて「下水道」となり、姿を消した――。

現在、東京の街を歩いていて、あるいは地図を眺めていて、曲がりくねって続く長めの緑道を見つけたなら、十中八九それは暗渠であり、かつてそこに川が流れていた名残りだ。少し注意して歩けば、「〇〇川緑道」などと名づけた標識が見つかるかもしれない。なかには世田谷区の北沢川緑道のように、暗渠の上の緑道に新たにせせらぎを設けて水を流し、地域の憩いの場となっているところもある。ここではメダカやザリガニなどの姿も見られ、子どもたちの歓声も聞こえてくる。

谷端川、桃園川、田柄川、蛇崩川、九品仏川……かつてあつた川の名前を冠した緑道も東京には多いが、名も知れぬ小川に蓋をしただけの暗渠は探せばそこかしこに見つけることができる。最近では暗渠をテーマとした本も人気があるし、暗渠探訪ツアーのような催しも各地で開催されているようだ。
 のんびり街を歩いてみたくなったら、あなたも川の痕跡を探してみたいかがたろう。かつての川を想い、そこにあつた風景や暮らしを想像してみたいとなみは、あなたの東京ライフをひととき豊かなものにしてくれるかもしれない。





セルフヘルプグループとは、共通の悩み、問題を抱える人やその家族が自発的に活動を行う集まりのことです。このコーナーでは、セルフヘルプグループの思いや活動内容を紹介し、社会の認識を深めたり、他のグループの運営のヒントとなることをめざします。

自分のジェンダーとセクシュアリティを すべての人が大切にできる社会に向けて

LGBTQ、性的マイノリティと理解・ 関心のある人の居場所 lag (ラグ)

今回は、LGBTQ^(※1)、性的マイノリティと理解・関心のある人の居場所づくりに取り組んでいるlag (ラグ)のまさよしさんとゆうさんにお話を伺いました。

心が楽になる場を求めて

まさよしさん 私は普段、LGBTQ、性的マイノリティの方やその周りの人の相談支援に携わっています。私自身はノンバイナリー^(※2)でもあるトランス男性^(※3)です。性自認はほとんど男性寄りで、ここ4〜5年で性別を移行し、今は男性として暮らしています。ホルモン治療をして名前も改名し、男性として過ごすようになってからは、子ども頃からずっとあった「死にたい」という気持ちはなくなりました。今は息ができるようになったというか、生きていく感覚を取り戻してきたような感じです。

幼少期から自分のことは分かっただけで、気持ちは蓋をして我慢することが多く、親の期待や他人に合わせたり、異性愛の女性を演じることが長年のクセのようになっていました。小さい頃から感じていた女性を好きになる気持ちを認められたいのは、自分の性別違和感を受け入

れてから、もう少し後です。苦しかった時期は、少しでも心が楽になる当事者の交流会に参加していました。時間はかかりましたが、交流会に参加しながら自分を受け入れられるようになってきたことから、女性ではないけれど完全に男性とも言い切れない感覚のことも話せる場所が欲しいと、2016年9月にlagを立ち上げました。今は、戸籍上女性のパートナーと暮らしています。

ゆうさん 私は普段、出版物に関わる仕事をしています。自分はノンバイナリー^(※2)だと思います。女性であるということは受け入れがたいけれど、男性でもないという感じですが、小学校へ入る前から、自分は結婚しないだろう、子どもは産まないだろう、と漠然と暮らしていました。戸籍上女性のパートナーと、20年近く一緒に住んでいます。社会的に何も保障もされず、こちらから何も与えることはできない、自分が社会に必要とされていない、という感覚があります。

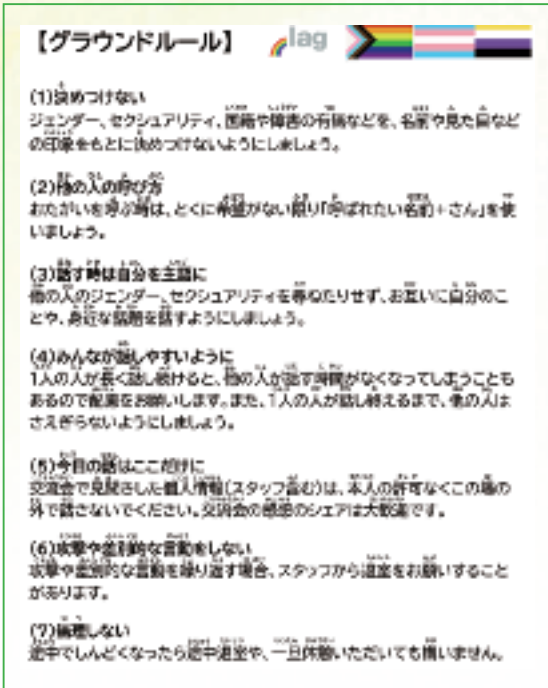
最初は、自分のことをトランス男性だと思っていました。「女性が好き」「男性」なのかなと思っていただけではなく、手術もしたくないし、

かといって女性として見られるのはすごく嫌だな、という感覚がありました。そんなとき、たまたまテレビ番組を見て、lagの交流会があると知り、参加してみました。

まさよしさん 当時はまだ、男女の二元論に自分があてはまらないと感じている人の交流会(リアル開催)は、そんなにありませんでした。交流会をやってみたら、いろいろな地域から来ていただき、20〜30人ぐらい集まるようになりました。人数が多くなるにつれて、次第に一人でやるのが大変になってきたところ、2019年ぐらいから少しずつ、参加者の皆さんが「手伝うよ」と言ってくださり、今は6人で運営しています。

日常生活の中での困りごと

まさよしさん 治療を受けて男性として暮らせるようになる前は、自分の名前を呼ばないで欲しいとか「お母さん」と呼ばないで欲しい、という思いがありました。私には子どもがいるのですが、子育てをしていたとき、まわりからは「ボーイッシュな女性」として認識されていて、そのたびに「女性ではない」とカミン



lagのグラウンドルール。内容はできるだけ簡潔にするよう心がけた。ルールができてから、場の雰囲気がいよりの和やかになったそうだ。

グアウトしてまわるのがとてもしんどかったです。一時期は、家の外に出るのも怖いくらいでした。性別移行してからは、その苦しさがなくなってきた反面、カミングアウトしていない場所で過去の話をしづらく、男性として生きてきた体で話す、ということもありました。この他にも、公衆浴場に入れないということや、ホルモン剤が切れて生理が来るとやっぱり希死念慮がおきたりするので、お守り代わりにホルモン剤や飲み薬を確保したりということもありました。

健康診断にはずっと行けなかったのですが、昨年、5年ぶりに受診できました。受付の人がまわりにきかないように、「性別欄はどちらでもいいので書いてください」と言ってくれ、男性欄にチェックできたところがきっかけになり、「この病院なら大丈夫だな」と受診することができました。ただ、本人確認書類を提示するときは、まだまだ緊張するところがありますね。保険証の表面に性別欄が書いてあるので、それを裏面にできないだろうかとか、工夫してもらえると助かることはあります。

えれないように、「性別欄はどちらでもいいので書いてください」と言ってくれ、男性欄にチェックできたところがきっかけになり、「この病院なら大丈夫だな」と受診することができました。ただ、本人確認書類を提示するときは、まだまだ緊張するところがありますね。保険証の表面に性別欄が書いてあるので、それを裏面にできないだろうかとか、工夫してもらえると助かることはあります。

「性別欄はどちらでもいいので書いてください」と言ってくれ、男性欄にチェックできたところがきっかけになり、「この病院なら大丈夫だな」と受診することができました。ただ、本人確認書類を提示するときは、まだまだ緊張するところがありますね。保険証の表面に性別欄が書いてあるので、それを裏面にできないだろうかとか、工夫してもらえると助かることはあります。

ゆうさん 医療関係だと、婦人科は結構きついですね。初診の際に「異性と性交渉して妊娠・出産するものでしょ、戸籍上女性性」という前提を感じ、私のような存在が想定され

ていないのかと思うと居心地が悪くなります。ただ、職場では、今はコロナのためにずっとリモート状態になっているので救われています。というのも、社長がめっちゃくちや世話好きで、私に「彼氏いないの？」から始まり、相手がいなくなると、誰かと会わせようとしてくるのです。毎回嘘をつかないといけないので、それが本当に苦痛です。私も「人との接触は必要ない」とか、「恋人はいらない」というキャラを演じないといけない。

参加者が安心を感じられるための工夫

まさよしさん lagの活動は交流会が主軸なのですが、ノンバイナリーを含むトランスジェンダーの参加が比較的多いです。ただ、それ以外の方もかかわってくださるようになっていっているので、ジェンダーやセクシュアリティに関するマイノリティの人が広く参加できるようにしていきたいと思っています。

ゆうさん オンラインだと、遠隔地から参加してくださる方もいますし、小さいお子さんがいる方でも参加できるというメリットはあります。そのように、ゆるい参加の仕方ができるのはすごくよいなと思っています。

交流会では一度も会話したことがないという相手に、いきなり自己紹介しようというのは、結構ハードルが高いので、毎回必ず一つは

あと、親御さんが最初に参加して、その後からお子さんが少しだけ参加してくださったということもありました。多分、お子さんが思春期で悩まれていたのかと思うのですが、そ

のようなオンラインならではの可能性もあるのだと思いました。

まさよしさん 交流会には、子どもである当事者の親御さんや地域の支援者の方が参加してくださることもあります。LGBTQについて勉強したいという方がいらつしやるとき、当事者からは少し話しづらさを感じた、という声を聞いたことがあります。当事者のみが参加できる場合と、さまざまな方が交流できる場を分けるといった工夫をした方がよいのかも、と感じています。当事者とアライ（ally）^{※4}の線引きは、曖昧だと思うところもあるのですが、「安全」の感覚というのにも人によって違うので、一身の危険を感じている人の目線に合わせた方がよいだろうと考えています。

交流会の中では、例えば、健康診断をどういうふうに受けたとか、服を脱がないといけないときはどのような服装であれば胸が目立たずに済

んだか、などの情報を共有しあうこともあります。性別を移行するための治療の話題や病院での出来事などを話すこともありますね。

ゆうさん そこで何か有益な情報を得ると言うより、自分の経験を吐き出せる場があることが大事ですよね。他では話せないことだったりするので…それが一番の目的で交流会に来ているのかなと思います。

まさよしさん あと、距離感は大切にしています。スタッフが仲良くなりすぎること、参加者が見えなくなってしまうということもあり得ると思っています。お互いが適度な距離感を持ちながら情報交換したり、自分のメッセージを話したりということを大切にしています。別の団体では、差別的な言動をする人たちが来たという例もあるので、万が一そのような場面に遭遇したときにどうするかを、毎回スタッフで話し合っています。内部でのルールをつくったり、コミュニケーションなどもしています。お互いに立場が違っていると衝突が起きてしまうこともあり得るので、もし感情を抑えられずにぶつけてしまうことがあったらどうするかなど、みんなで話し合っています。

ゆうさん 私は自分自身の当事者性に向き合えるまでに時間がかかりました。人に手を差し伸べることで、本当は自分が助かっているということとを、I a gにかかわるうちに気づかせてもらったというか、いろいろ学ぶことが多いです。

I a gをやっているよかったですと感ずること

まさよしさん I a gを立ち上げて個人的によかったのは、つながりができたことです。いろいろな人とのつながりができたこと、同じ体験をしている人同士で知恵を共有しあえる場ができたのは、一番の財産だと思います。また、近隣地域で居場所づくりをしている人たちとのつながりや、他の地域の支援者の方が手伝ってくれることも財産です。

ゆうさん 一口にLGBTQ、性的マイノリティと言っても本当に全然違います。環境も違うし、危険を感じるポイントも全く真逆だったりするので、「同じだね」と勝手にジャッジしてはいけないし、もう一步、「何でこの人はこういうことを言ってるんだろう」と深掘りしていくと、「ああ、そういうことだったんだ」と普

段は見えないことに気づくこともあります。I a gにかかわる中で、「これは知っておかないといけない」と思うことが出てきたり、それは自分にも関係があることなので、機会をもらえて本当によかったと思います。

まさよしさん 私自身、一人じゃないうっていう感覚を強く持てるようになりました。受けとめ合える場所があるということ、それが一番だと思います。活動を続ける中で、Xジェンダー^{※5}、ノンバイナリーというところに、私自身もこだわりすぎていたのだなと思います。他の団体で相談の仕事にかかわる中で、少しずつ自分の世界が広がっていったような、いろいろな相互作用だと思っています。少しずつ枠が広がってきたような感覚があり、いろいろなセクシュアリティの人が参加してくれるような居場所もできるといいな、と少しずつ思い始めてるところです。

ゆうさん 自分にパートナーがいることを気軽に話せることがどれだけ貴重か、ということを感じています。日常の話を気兼ねなくできることは、これまで経験したことがありませんでした。そういう場所が一つで



lagが作成した冊子『I a g』

きると自信が出て、今回のような取材でも話せるようになりますし、まず安全な場所があるということが心の支えになっています。

これからやっていきたいこと

まさよしさん 今までの活動をとおしてできたご縁を大切にしながら、スタッフも、それぞれ他の仕事を抱えながらで結構忙しいため、頻度は少し下がるかもしれませんが、なんらかの形で居場所は続けていきたいと思っています。あと、中学校の先生や支援者の方から、講座や授業で話して欲しい、という声をいただくこともあります。そういうときに、lagの他のスタッフが講師になることを、微力ながらサポートできたらいいなと思います。

最近、lagで『という』という冊子を初めてつくったんです。これまでイベントでお話していただいた方の特集や、参加者の方々のエッセイをまとめたものです。表紙は、スタッフみんなで集まって、絵具を持ち寄って絵を描き、ゆうさんにデザインしてもらいました。2年かかってようやくできたのです。労力も時間もかなりかかりますが、地道にこういったものを発信すること

を、会員の皆さんと話し合いながら、できる範囲で続けていけたらと思っています。

ゆうさん 初めて中学校に行つて授業をするという機会をいただきました。自分には子どもがいらないから、子どもとかかわることなんてない、と思っていたのです。でも、中学校のときの自分に話すような感覚だったらできるかなと思つて、今から楽しみにしています。

まさよしさん もし、性的マイノリティの方で、一人で悩んでいたり、今いる環境が安全でないと感じる人がいたら、「あなたは一人ではない」こと、「束の間でも安心できる場所がある」こと、「つながる場所がある」ことを伝えたいです。もう一つ、男女別のシーンや生き方の押しつけなどがある環境では、性的指向や性別違和感についてカミングアウトしにくく、我慢してしまう人もまだまだ多いと思います。読者の方で、ジェンダーやセクシュアリティに関心がある方がいたら、まずは知っていただき、安心して生活できる、働ける環境づくりに思いをはせてもらえたらと願っています。

ゆうさん 私は、〇〇らしさのようなもの押しつけられなくて、結構大変でした。多くの人が、何かしらの〇〇らしさを押しつけられていると思うので、「もうちょつと楽に生きられたらいいですね」って伝えたいです。

インタビュアー：金井聡（相談担当）
朝比奈ゆり・海方美雪（編集部）

- ※1 レズビアン (Lesbian)：女性同性愛、ゲイ (Gay)：男性同性愛、バイセクシュアル (Bisexual)：両性愛、トランスジェンダー (Transgender)：出生時に割り当てられた性別と性自認が異なる状態、クエスチョニング (Questioning)：自分自身の性のあり方がわからない、決めたくないなどの状態)の頭文字をとった、性的マイノリティの総称をあらわす概念。レズビアン、ゲイ、バイセクシュアルは性的指向（恋愛や性的欲求の対象がどの性に向かうか）を示すのに対し、トランスジェンダーは性自認（自分自身がどの性に属しているか）と認識しているかをあらわす）を示す概念でもある。
- ※2 「男性と女性」といった二元論にとられない性のあり方。
- ※3 トランスジェンダー当事者の中で、出生時に割り当てられた性別は女性で、性自認が男性である人たちを意味する。
- ※4 当事者への理解者、協力者を意味する。
- ※5 自分自身の性自認が男性でも女性でもないと感じる状態。ノンバイナリーとほぼ同じ意味で使われることもある。

lag (ラグ)



キーワード LGBTQ、性的マイノリティ

LGBTQ、性的マイノリティや理解・関心のある人ための交流会などを中心に、居場所づくりに取り組んでいる。毎回、参加する際にはグラウンドルールを読んで、誰もが安心して参加できるよう配慮している。一人ひとりが自分のセクシュアリティを差別されない社会になることをと、lagの活動を続けている。

運営メンバー 当事者

活動内容 ・LGBTQに関する情報発信 ・LGBTQ交流会の実施
・勉強会 (LGBTQ など) の実施 ・オンライン上映会 (トランスジェンダーの現状を知る等)

参加できる人 ノンバイナリー、Xジェンダー、トランスジェンダーの方。
それ以外のアライの方の参加も歓迎です。お気軽にご連絡ください。

活動エリア 都内 (主に武蔵野市など) **集まれる場** あり (状況によりオンライン開催の場合もあり)

連絡先 office.lag.dialog@gmail.com **Web サイト等** https://lag-dialog.amebaownd.com (Web サイト) ・ @lag_dialog (Twitter)



HP



Twitter

連合東京の取り組みと
「災害時のための市民協働 東京憲章」

真島 明美（連合東京）



■防災減災にむけた取り組み

連合東京は、東京で働く労働者で組織され現在125万人の組合員を有する労働団体です。

1995年1月17日の「阪神・淡路大震災」発生当日、役員それぞれが対応にあたる中、その日の夕刻から緊急カンパ（寄付）を実施、それと並行して、現地救援隊を組織し救援活動を行うこととなりました。

この教訓を踏まえ、東京に大災害が発生した場合を想定し、連合東京内に防災プロジェクトを設置、1996年10月に「連合東京の防災対策」として取りまわっています。



2022年度VST研修の様子（身近なものを使った応急救護を学ぶ）

この中で東京都や区市町村に対する要望、企業・経営者団体に対する要望をまとめつつ、連合東京自らが行う防災対策として、教育訓練を通じて人材育成を行うこととし、「連

合東京ボランティア・サポートチーム（以下VST）」を1997年4月に結成し、研修がスタートしました。

研修内容は多岐にわたり、日本赤十字社東京都支部による「災害時を想定した実技訓練」や障害者団体と連携した「まちあるき」などの実技訓練が中心となっています。研修終了後は「連合東京ボランティア・サポートセンター（以下VSC）」に

登録され、高齢者や障害者などの日常生活サポート活動等地域に根付いた活動を行っています。この積み重ねにより、現在では、VSTの研修はVSCメンバーが講師を引き受けるなど、自発的な運営を心がけています。

連合東京は、この研修を通じて単に災害時の対応やスキルを身につけるだけでなく、多くの仲間と出会い、人と人が豊かな人間関係を築く場を目指しています。研修で得た知識や経験をそれぞれの職場や地域を持ち帰り、できることから始めてほしい、私たち一人ひとりが「ほんの少

しやさしくなること」、「そんな人材を目指して取り組み、現在のVSC登録者数は600名にもなります。

連合は大きな組織ではあるものの、全て連合内で解決できるわけではありません。来るべき災害に備えるためには、多くの方々と連携する必要がある。その後、多様な団体と連携し地域で顔の見える関係を作るため「東京災害ボランティアネットワーク（以下東災ボ）」が1998年1月に設立され、連合東京も参加団体に加わることとなります。このことにより、労働組合連合が社会的な役割として市民活動と連携して一緒に活動する礎をつくり、これまでも東災ボの一員として、「帰宅困難者対応訓練」や「1・17灯りのつどい」などの防災・減災に向けた取り組みをはじめ様々な自然災害に対する被災地支援活動を実践してきました。

連合東京は、普段から災害や防災、減災に特化した活動をしているわけではありません。しかし、VSCの活動を通じて「いい人」づくりを実践してきたつもりです。被災現場で求められることは、がれきを片づけるなどの肉体労働

も必要ですが、被災された方にかに寄り添えるかが重要です。

■東京憲章の一翼として

東京憲章は、東京都災害ボランティアセンターアクションプラン推進会議における多様な団体との連携事業として策定されたもので、東京都災害ボランティアセンターの運営は東京ボランティア・市民活動センターと多様な団体との連携のもとで運営されることとされています。その役割を担うために新たに設立された災害協働サポート東京（CS-Tokyo）は、東京での大規模災害時に多様な団体による連携・協働の取り組みができるよう、平時からの情報交換、経験交流を通じて「防災・減災」に取り組むこととし、連合東京もその一翼を担っています。

東京憲章は策定して終わりではありません。私たち一人ひとりが理解をし、実践していく必要があります。東京憲章は平時・災害時の共通の基本方針を定め、一人ひとりの「いのち」と「くらし」をみんなで支えることにあります。そのために、私たちができることをこれからも実践していきたいと思っています。

つぶやき ブレイク

vol.27



*当センタースタッフによるコラム

文学者ととともに過ごす やさしい時間

文学者ゆかりの場所へ

文学者ひとりを選び、その人の作品を読み、その人にゆかりのある場所を訪ねてレポートにまとめる。これは、娘が通う中学校で夏休みに出される課題である。私は、娘が選んだ文学者の「ゆかりの場所」に毎回同行し、存分に楽しませてもらった。

中1で訪れたのは、三鷹市山本有三記念館。彼が実際に暮らした洋館が記念館になっている。なんとも居心地のよい素敵な建物だった。

中2では、早稲田にある漱石山房記念館を訪れた。その帰り道、娘がぼつりと呟く。「夏目漱石、イケメンだった」

たしかに記念館で見た漱石の写真は、見慣れたお札のイメージとは違っていった。表情が違っただけでこれほど印象が異なるのは新しい発見だった。

中3では、太宰治が晩年に暮らした三鷹市内のスポットをいくつか巡った。彼が眠る墓にも行った。ご存知だろうか。彼の墓の斜め向かいには、森鷗外の墓があることを（太宰は鷗外をとても尊敬していた）。著名人おふたりの墓だか

ら、さぞ立派なのだろうと思いきや…雑草が茂り、枯れかけた花が供えてあるのを目にして拍子抜けした。

次に、太宰のお気に入りだったという跨線橋へ。この橋は、残念ながら老朽化のため取り壊しが決まっている。それにしても、橋の上からの眺めが素晴らしい。「撮り鉄」の聖地になっているというの納得だ。私は橋の上で彼も見たであろう風景を眺めながら、彼の波乱万丈すぎる人生について思いを巡らせた。

「跨線橋からの眺め」



(撮影☆早川)

こんなふうに、「その人」について知ることができる場所に行くと、あれこれ考えるのが好きだ。その人はどんな土地でどんな両親のもとに生まれ、子ども時代をどんなふうに通し、どんな挫折を味わい、どんな仕事をしたのか。そして、どんな人を愛し、どんな最期を迎えたのか。それらを知る

ことは本当に面白い。

一昨年夏に訪れた、猪苗代町にある野口英世記念館もよかった。彼について大体のことは知っていたけれど、彼の凄まじい努力の軌跡を目の当たりにして、ただただ尊敬の念を抱く私であった。彼にあやかりたくて、入館記念にもらった鉛筆を使って、半年後に迫った社会福祉士の国家試験の勉強をしようという心を決めた。もちろん試験当日も、その鉛筆で臨んだ。英世さん、その節はたいへんお世話になりました！

思えば、私は子どもの頃から伝記を読むのが好きだった。あれだけ多くの伝記を読んだのだから、よい刺激をたくさん受けて、もう少しまともな人間になっていてもよかったはずなのだけだ。

偉人が成し遂げた偉業にはたいして着目せず、子どもながらに「これだけ個性的な息子のことを、才能を潰さないように育てた親が偉いよな」、「物凄い才能を持って生まれるのも大変そうだな」、「この人と結婚するのはごめんだな」なんてことばかり考えていた。まあいいや。凡人は凡人なりにたくましく生きていこう。

(早川幸子)

三鷹市山本有三記念館
三鷹市下連雀 2-12-27



【開館時間】
9:30～17:00
有三記念公園（南側）無料

*大正末期に建てられた本格的な洋風建築。1994年、三鷹市文化財に指定。



北側外観（写真提供：公益財団法人三鷹市スポーツと文化財団）



イラスト☆eippo

野口英世記念館
(福島県耶麻郡猪苗代町)



*入館記念にもらった鉛筆（イメージ）野口英世のイラストに「ファイト」などのメッセージが…

新宿区立漱石山房記念館
新宿区早稲田南町 7



【開館時間】
10:00～18:00
【展示室】1F・2F
*導入展示（1F）無料

*ブックカフェ、ミュージアムショップ、図書室、講座室等あり。



せがいをみる

海外におけるボランティア・市民活動や市民と社会とのかかわりを知る・考える連載ページ。

今号では、インドネシアにおける地震やコロナ禍での支援の活動についてお伝えします。

寄稿

コロナ禍での海外支援 〜インドネシア・ジャカルタにて

小林良子

(ジャカルタ・ジャパン・ネットワーク事務局長)

ためのオンライン環境を整えたい等々、現地NPOから要請があり、日本から支援金を送る、奨学金を増やす、直接、子ども図書館に本を送る等々の支援を行ってきました。現地ですること、日本からできることを各々検討して行ってきました。

● 新型コロナウイルスと地震 ——緊急事態での支援を 現地NPOとともに

パン・ネットワークです。自分たちの興味のあることでできること、例えば人形劇、絵本の翻訳、奨学金、病気や障害のある子どもたちへの支援などを、現地のNPOとともに、支援の方策を教えていただきながら24年間活動を続けてきました。

● 活動の始まりとスタンス

1998年に夫の転勤とともに移り住んだインドネシア・ジャカルタ、アジア経済危機の真っ只中でした。貧富の差の大きさと路上で物乞いをする子どもたちを見て、日本での自分たちの生活を振り返り、一市民として何かできることはないかと、転勤者の帯同婦人たちで1999年に結成したのが、ジャカルタ・ジャ

● 結成時はジャカルタ暴動¹

直後で、緊急避難から少しづつ日本人が現地に戻り始めた時期です。「私たちは外国人であり、いつ何時、緊急避難するかもしれない」という考えが、常にありました。そのため、独自にプログラムを作ることにはせず、必ず現地NPOとの連携で行ってきました。2001年からは日本での活動も行っています。

2020年に世界的に新型コロナウイルスのパンデミックが起き、駐在者の家族の多くは帰国することとなりました。当会のメンバーの多くも同様で、現地での活動を縮小せざるを得ませんでした。一方で、現地は経済が回らなくなり、貧困状態の人々への支援は必至となりました。ストリート・チルドレンを保護している施設からお米が無くなったとか、スンバコ(米・油・塩といった基本的な食料の詰り合わせ)を贈る支援をした

い、子どもたちの自宅学習の

2022年夏頃より日本人家族も戻り始めました。当会は、独自の現場は持ちませんが、現地メンバーが足を運んで確認することを大事にしてきました。少しずつ、訪問が始まりました。そんななか、11月21日にジャカルタ郊外のチアンジュールというところでマグニチュード5.6の地震²が起きました。被災地は20年来のつながりがある現地NPO「タリアシ」の活動地域でした。タリアシのスタッフと連絡を取り合い、まず、炊き出しのための支援金を送りました。ジャカルタでは12月1日に集めた支援物資を持参、日本企業の協力を得て食料の配布等を数回行い、1月には支援物資と児童書の持参、2月は支援金送金等々を

ジャカルタ・ジャパン・ネットワーク
Jakarta Japan Network (J2net)



Facebook ホームページ

困難な状況で暮らすインドネシアの子どもたちに対して、医療・教育・福祉に関わる事業を行い、人権の擁護及び人材育成に貢献することを目的として1999年に発足。インドネシアの子どもの生活状態の調査・研究、国際理解を深める活動も行っている。



支援物資を震源地・チアンジュールへ運ぶ／地震直後の炊き出しの様子
写真提供＝ジャカルタ・ジャパン・ネットワーク

行ってきました。少ないメンバーですが、現地NPOとの連携で支援させていただいています。

他にもジャカルタ内で、貧困者向けの病院へ4人の子どもたちへの手術代の支援、医療用ミルク代の支援など、今年度は今までにない額の現地支援を行っています。いずれも、現地NPOとの連携が進めてきたからこそ、世界的パンデミックの状況でも支援が途切れることはありませんでした。かつて、現地NPOとともに活動をする決め、連携を守ってきたことがよかったですと考えています。ただ、今は現場確認のための現地メンバーが少なくなったことが痛手です。少人数に活動が集中してしまいます。これからの情勢の回復を願うばかりです。

●日本での活動とこれから

2001年から日本でも活動を始め、日本でもできること、絵本の翻訳とインドネシア語の本を作成すること、資金を集めるために物品販売を

することなどを行っています。また、自分たちが楽しめる活動も行っています。たとえば、グローバルフェスタJAPANN^{*3}やボランティアフォーラム^{*4}といったイベントへの参加、絵本翻訳のためのインドネシア語の勉強、美味しいインドネシア料理を作って食べる^{*2}こと等です。美味しいインドネシア料理を食べるために2013年から料理教室を行っていましたが、コロナ禍が続く2021年にその成果を本にして出版しました。調理・文章・写真・デザイン全てメンバーで行いました。こちらの収益も支援に充てています。

25年前にジャカルタの地を踏み、目の前の貧困の状況に「日本からたった7時間しか離れていないのに、どうしてこうなんだろう」と思い、活動を続けてきました。決して専門家ではなく、同じお母ちゃん同士として、お互い様で動いてきました。これからも動いていきたいと考えています。

*1 1998年5月、ジャカルタで反政府デモを行っていた学生らが治安部隊の発砲を受け、4人が亡くなったことに端を発した暴動。スハルト独裁政権崩壊の引き金となった。

*2 2022年11月21日に発生し、死者300人超、被災者は10万人以上となった。震源地のチアンジュールは首都ジャカルタから80キロほどに位置する。

*3 国際協力やSDGsなどに取り組む多様な団体が参加する国内最大級の国際協力イベント。

*4 東京ボランティア・市民活動センターが行う催しの物販(本誌26ページ参照)。



ジャカルタ・ジャパン・ネットワークのメンバーですべて手掛けた料理本『インドネシアの家庭料理』(2021年9月発行/1,000円)。購入は同団体のウェブサイトからの申し込み、もしくは、東京ボランティア・市民活動センター「ふれあい満点市場」にて。

チアンジュール地震支援・KENZIE君ミルク支援にご協力をお願いします。

*てんかんと重度の障害を持つ、KENZIE(ケンジ)君のための活動を進めています。発作を抑えるために、月に12缶の特別なミルクが必要です。
*お振り込みの際は、お名前の前にチアンジュール地震支援は「C」を、KENZIE君ミルク支援は「K」をつけてください。よろしくをお願いします。

- ゆうちょ銀行
店番: 029 / 店名: 〇二九 ゼロニキユウ店 / 当座預金 / 口座番号: 003121
- 三菱東京UFJ銀行
横浜支店 / 普通預金 / 口座番号: 4390963 / 口座名義: J2ネット 会計 岡則子

ネットワーク

本誌のバックナンバーは
右記からご覧ください。



読者の声

～本誌382号より～

読者の皆さんからいただいたアンケートの一部をご紹介します。

◇「特集」働いている人たちが 身近な地域とつながる!!

・ボランティア活動は個人が大きなことを成し遂げる必要はなく、今自分が持っているものを活かしてみたいという気持ちがあるのだと感じました。
・子どもたちに対するボランティアが多く広がっていることで、日本の未来を支える力が育っていくことを期待したい。

◇思い立ったがバラ日

・地域とともに、猫のために

・今回だけでなく、こちらのコーナーを読むと、いつも心が温かくなります。人間の身勝手さにより、傷つけられる動物の現状は心が苦しくなりますが、それを救えるのもまた、人間なのだと感じました。

◇連載 せかいをみる

・ワガドウグのストリーツの「子ども」たち

・ストリート・チルドレンという言葉を知っているつもりで使っていたのに、何もわかっていないことを実感しました。そこにも社会があり、大人も含まれるし、表現そのものがステレオタイプ化につながっていることに、今まで考えが及ばなかった。

◇あすマネ 市民活動は事務の堆積

・NPO団体で働く家族から事務局が何でも対応している状況になっているとよく耳にします。立場や役割が異なるからこそ、コミュニケーションが必要だと思います。

◇TVAC News 東京憲章

・誰にとっても、被災することは大きな負担であるため、平時に多様性が尊重される社会でないと、災害時に、より難しい立場の人が尊重されるのは難しいと感じた。

◇いいものみいつけた!

・社会福祉法人泉会泉の家

・ペットフードを作る事業所は初めて聞いた。とてもかわいく、どこか温かみを感じるので興味をひかれた。

◇つぶやきブレイク

・スポーツにもやはり差別が付き物で、もし、それに対抗する人々のことをもっと早くに日本でも広めていっていただければ何かが変化したのだろうかと考えさせられた。

お気軽にご意見・ご感想を
お寄せください。



本誌で使用しているQRコードは、(株)デンソーウェブの登録商標です。

東京ボランティア・市民活動センター

(TVAC: Tokyo Voluntary Action Center)

<https://www.tvac.or.jp>

東京ボランティア・市民活動センターは、ボランティア活動をはじめとするさまざまな市民の活動を推進・支援しています。どうぞご利用ください。

利用

会議室 会議室A・B(各40人)・C(15人) 無料
※会議室AB通し(80人)
貸出機材 印刷機(2台)紙持ち込み、点字プリンター
申込み 4ヶ月前から電話で受付(03-3235-1171)

情報提供

最新のボランティア・市民活動情報は、センターのホームページでご覧いただけます。<http://www.tvac.or.jp/>

開所時間

*ホームページでご確認ください。

火曜日～土曜日: 9時～21時 / 日曜日: 9時～17時
(月・祝祭日・年末年始除く)

交通アクセス

JR(西口)、地下鉄(東西線・有楽町線・南北線・大江戸線B2b) 飯田橋駅下車

ネットワーク

発行人 山崎美貴子

編集委員 五十嵐美奈(興望館)
上杉貴雅(オレンジフラッグ)
江尻京子(東京・多摩リサイクル市民連邦)
亀川悠太郎(葛飾区社会福祉協議会)
小池良実(岡さんのいえ TOMO)
齋藤啓子(武蔵野学院大学)
長畑洋(TDU-聖栄大学)
中原美香(NPOリスク・マネジメント・オフィス)
まつばらけい(フリーライター)
渡戸一郎(明星大学名誉教授)

TVACの公式ソーシャルメディア



編集・発行: 東京ボランティア・市民活動センター
〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸1-1
セントラルプラザ10階
TEL: 03-3235-1171 FAX: 03-3235-0050
E-mail: nw@tvac.or.jp

印刷: (株)丸井工文社
デザイン: 東京ボランティア・市民活動センター / (株)丸井工文社
表紙・P16イラスト: フローラル信子

2023年4月20日発行(通巻No.383)
ISBN 978-4-909393-44-9 C2036
定価 400円(本体364円+税10%)
本誌掲載記事の無断複製・転載を禁じます。



ふれあい満点市場

in ボランティアフォーラム TOKYO 2023

東京ボランティア・市民活動センターが毎年2月に行うボランティアフォーラムが、今年も2月10日から12日までの3日間、オンラインも活用しながら久しぶりに会場でも開催されました！今年のテーマは「Think・Act・Smile😊」。今号の「いいものみい〜つけた!」では、ふれあい満点市場の様子をお伝えします。

いいもの みい〜つけた!

Vol.
42

このコーナーでは、ボランティア・市民活動・福祉施設のグッズや作品を紹介します。

今回、ご紹介している商品は限定販売されたものですが、一部は東京ボランティア・市民活動センターにて購入することができます。

1 東京都青年団体連合



東日本大震災復興支援として宮城県南三陸町仮設住宅の“おばちゃん”たちが作った「エコたわし」の販売活動を行っている。

被災地のおばちゃん手編みのエコたわし
1個 200円

2 地球の友と歩む会 /LIFE



インドとインドネシアで農業開発を進めている国際協力 NGO。

ジャワ島のママさん手作り！
パティック柄ミニ・トートバッグ
1個 1500円



3 オレンジライン



視覚障害者の就労支援と生活支援を行っている団体。

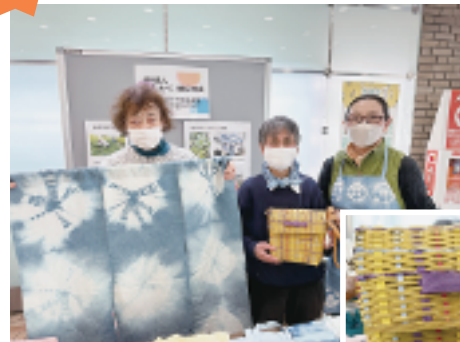
ミトン型エコたわし 1個450円

1点ずつ手作り！カラフルでかわいい！
窓ふきやバスタブ洗にも楽しくなりそう♪
おせんべい 1枚60円

点字ブロック+メッセージが印刷されているおせんべいは限定販売。



4 支え合う21世紀の会



原発事故による放射能汚染のため、稲作ができなくなった南相馬の農家民家の主婦たちが種から藍を育て、葉を収穫してつくった「藍染」やクラフトエコバックなど。

クラフトバッグ
1個 1500円〜



5 ジャカルタ・ジャパン・ネットワーク



パレッタ 1個300円
ピース 1個1000円〜



困難な状況で暮らすインドネシアの子どもたちを支援。インドネシアの子どもたちの治療（手術）支援のため、写真つきのメッセージも…（写真左中央）

6 東京カリタスの家



使用済み切手でつくったグリーティングカード
1枚150円
しおり 3枚で100円



キリスト教精神に基づく理念で活動約50年。

社会福祉法人清水基金

社会福祉法人・NPO法人への建物・設備等の整備を支援する助成事業や職員の方々の研修事業を通じて、障害福祉サービスの一層の向上を図ります。

2023年度 助成事業・研修事業を募集しています。

社会福祉法人助成事業

対象

障害者の福祉増進を目的として第一種・第二種社会福祉事業を営む社会福祉法人であり、2023年4月時点で開設後1年経過した事業所

申込期間

6月1日～7月31日(当日消印有効)

内容

- ・助成物件 利用者に必要な機器・車輛・建物等
- ・自己負担率 総費用の30%以上
- ・助成金額 1法人原則1物件、50万～1000万円
- ・決定時期 2024年1月末

NPO法人助成事業

対象

障害者の福祉増進を目的として第二種社会福祉事業を営むNPO法人であり、2023年4月時点で法人設立後3年経過し、開設後1年経過した事業所

申込期間

5月1日～6月30日(当日消印有効)

内容

- ・助成物件 利用者に必要な機器・車輛・建物等
- ・自己負担率 総費用の20%以上
- ・助成金額 1法人原則1物件、50万～700万円
- ・決定時期 2024年1月末

海外研修事業

対象

- ・社会福祉法人・NPO法人に所属し、障害福祉サービス等に従事しており、海外の障害福祉等から学ぶ課題を持ち、意欲的に挑戦する方
- ・実務経験5年以上、年齢25～60歳

申込期間

6月1日～7月31日(当日消印有効)

内容

- ・募集人数 6名(各コース共3名)
- ・助成金額(1名当たり、予定)
3ヵ月コース 200万円
1ヵ月コース 100万円
- ・決定時期 2023年10月
- ・研修期間 2024年4月～7月

文化芸術活動特別助成事業

対象

障害者の福祉増進を目的として第一種・第二種社会福祉事業を営む社会福祉法人及びNPO法人であり、2023年4月時点で、社福は開設後1年経過した事業所、NPOは法人設立後3年経過し開設後1年経過した事業所 ※他法人とのグループによる申込みも可

申込期間

5月1日～6月30日(当日消印有効)

内容

- ・助成物件 障害者の文化芸術活動に必要な道具・楽器・機器・活動をまとめた出版物等
- ・自己負担率 総費用の10%以上
- ・助成金額 1法人(1グループ)1案件、30万～200万円
- ・決定時期 2024年1月末

※2023年度国内研修は2回開催を予定しています。

詳細は清水基金ホームページをご参照ください。⇒<https://www.shimizu-kikin.or.jp/>